家庭科教育における生活情報

鈴　木　真由子*

Information for Science of Living in Home Economics Education

Mayuko SUZUKI

要　旨

家庭生活の合理的な経営において、生活情報は効率よく処理される必要があるだけでなく、適切な選択・収集が不可欠である。そこで、一定の目的を持った主体的な情報の選択・収集を経験する手段として新聞記事のスクラップとＴＶ番組の視聴を家庭科教育の課題として提示し、その有効性を検証したところ、以下のような結果が得られた。

(1) 課題提出後の自由記述から、学生は新聞・ＴＶが有効な情報源であることを再確認し、それまでの認識を変化させていた。また、それぞれの情報メディアの特徴をふまえた行動もうかがえたが、批判的精神を持って情報を吟味する姿勢はみられなかった。

(2) 課題提出半年後の調査によって、課題経験前と比較して「新聞を読む習慣」「新聞記事のスクラップ」「ＴＶの意識的な視聴」に明らかな向上が認められた。

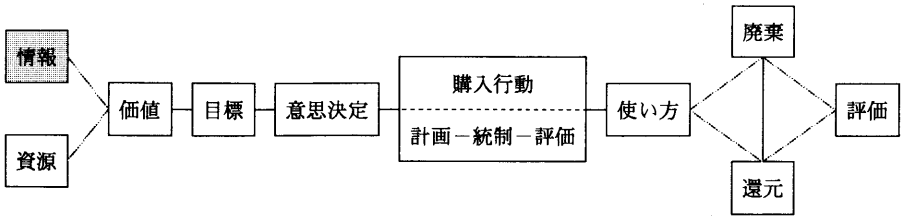
(3) 家庭科教育における合理的な生活情報の選択・収集能力育成に対して、提示した課題の有効性が示唆された。

1．緒言

高度情報社会は、我々の生活における「情報」の位置づけを大きく転換させた。パソコンの家庭への急速な普及（平成８年現在、保有率22.3％[1]）によって大量の情報を保存（記憶）しておけるようになっただけでなく、インターネットは双方向的な通信機能をも提供している。各種オンラインサービスが、企業から家庭へ浸透[2]していったことも、個人・家族のライフスタイルを変化させる要因としてあげられよう。

このような中、学校教育においては、昭和62年１月の臨時教育審議会「審議経過の概要（その４）」で、「情報活用能力」として、①情報による影響力の拡大への対応能力、②情報量の飛躍的増大への対応能力、③情報の質の変化への対応能力、④情報手段の普及、多様化への対応能力、の４つの能力育成の必要性[3]が示された。これを受けて平成５年度からは、中学校の技術・家庭科に「情報基礎」（選択領域）が新たに加わったが、平成９年11月に公表された「教育課程審議会中間まとめ[4]：教育課程の基準の改善の基本方向について」によると、“中学校技術・家庭科において「情報基礎」を必修とし、高等学校において教科「情報」を新設する”ことがカリキュラムの主な改善点として示されている。

*新潟大学教育人間科学部家庭科教育研究室



出所：村尾勇之編著『生活経営学－21世紀における個人・家族の諸課題－』家政教育社（1997年）p136

図１　生活手段の獲得と消費の課程

２．生活情報の捉え方

２－１　家庭科教育における生活情報

家庭科教育における生活情報は、生活の合理的な経営、すなわち生活手段の獲得と消費の過程[5]において、極めて重要な意味を持っている。

図１に示したように、個人・家族が実現しようとする価値を決定するとき、資源の適切な把握・活用とともに、生活をとりまく情報の合理的な処理が要求されるのである。このとき必要とされる能力は、先述の４つの「情報活用能力」の前提となるものと考える。つまり、効率よく情報を処理する技能にとどまらず、日々更新される情報を適切に選択し、収集するための能力が育成されなければならないといえよう。

三宮氏は、これを情報を批判的に見る目、すなわち「情報を見抜く目[6]」とし、与えられた情報を的確に評価できる能力として位置づけている。また、氾濫する情報について、他者がどのような処理過程を経て発信したものなのかを把握し、その適否を評価できる能力を身につけることは、生活者の自衛手段としても不可欠なものとしている[7]。

具体的な日常生活の場面では、食品の成分表示や衣類の組成表示など、製造メーカーから提供される情報を正しく読みとる力や、複数のカタログから目的にあった商品を選択する力などがこれに相当するといえよう。同様に、新聞・雑誌の広告、ＴＶのＣＭとして提供される情報、例えば健康食品やダイエット関連商品、資格取得のための各種サービスなどに対する情報についても「情報を見抜く目」が求められよう。

以上述べてきたように、家庭科教育において育成すべき基本的な力は、生活情報の適切な選択および収集能力である。これらは情報処理の大前提となる能力であることに加え、消費者教育に求められる能力[8]でもあり、ここに家庭科教育との接点を見出すことができる。また、生活情報を発信するメディアの特徴を把握し、そのメリット・デメリットをふまえた適切な処理が必要であるといえよう。

２－２　教員に求められる生活情報の選択・収集能力

学校教育においても、情報を的確に批判する能力が不可欠であることはいうまでもない。企業が提供する各種情報の真偽・適否を確認することなく、教材として使用するなどは論外である。特別の目的を持った情報や偏見誤報の存在も否定できない[9]。したがって、「情報発信者の意図はどこにあるのか」「提供されたデータは科学的根拠に基づいているか」「その内容が事象全体のどの部分をどの程度説明しているのか」「どのような立場で提供された情報なのか」など、批判的精神を持って情報を十分に吟味し、総合的に判断することが重要である。

村井氏は、教員に必要な基本的事項として、生活情報や関連資料の収集・整理[9]をあげ、教員が自ら主体的にこうした努力を重ねることによって、初めて研究・知識不足や偏見を持つことが回避できるとしている。

教員がこうした能力を身につけるためには、

一定の目的を持って意識的に情報を収集し、整理するという経験が不可欠であろうと考えた。そこで、具体的な手段として新聞記事のスクラップとＴＶの視聴を小学校専門（家庭）の受講生に対して課題として提示し、その有効性の検証を試みた。

３．課題の有効性

３－１　課題の提示

平成９年度前期の小学校専門（家庭）の受講生に対して、初回に以下の課題を提示した。

①　新聞記事のスクラップ

②　ＴＶ番組のレポート

具体的な内容は、次の通りである。

１）キーワードの選定

まず、キーワードとして「環境」「消費者」「家族」「健康」「情報」「安全」「権利」「福祉」「国際」「文化」を提示した。各自、この中から興味・関心のあるものを１つ選択し、それに関連する記事のスクラップ・ＴＶの視聴を課した。キーワードをあらかじめ選択することで、前期の課題が後期の家庭科教育法（初等）[10]における教材研究・指導案作成時の問題意識の向上につながると考えた。また、これらのキーワードは家庭科教育における今日的課題に関する内容であり、家庭科教育の鍵になる概念でもある。

２）課題の条件

①　新聞記事のスクラップ

この課題の第１の目的は、新聞を読む習慣を身につけ、新聞を有効な情報源として認識し、必要な生活情報を収集・整理することである。また、この課題を通して、印刷（活字）メディアの特徴を把握し、そのメリット・デメリットをふまえた適切な処理について理解することを第２の目的とした。さらに、副次的な効果として、記事内容について吟味し、批判的な目で「情報を見抜く」ことに期待した。

スクラップは、教育現場におけるＮＩＥ（Newspaper In Education；新聞を教育に活用しようとする取り組み）の一環として取り上げられる機会も少なくない。したがって、こうした経験がＮＩＥへの興味・関心を喚起する一助となるだけでなく、新聞に対する抵抗感をなくし、教育現場で活用するための布石になるのではないかと考えた。

量的には、１週間に１つ以上の記事を取り上げることとし、最少でも20程度の記事をスクラップすることをノルマとした。情報の発信源を明らかにする意味で、記事ごとに「新聞名」「日付」「朝・夕刊の別」を記録させた。また、見出しだけを手がかりにした「貼るだけ」のスクラップにならないようにするため、記事内容に対するコメントをつけさせた。コメントは、記事に対する漠然とした思いを整理し、自分の考えとしてまとめる上で有効ではないかと考えた。講義の冒頭に、“今週の出来事”として１～２人に記事の概略とコメントの発表と質疑の時間を設けた。

最後に、スクラップした記事全体を通しての考察を求めた。一覧性、保存性といった印刷（活字）メディアの特徴は、記事全体を通して考察することを容易にすると考えられる。ここでは、一貫したテーマ（キーワード）に沿った記事をスクラップすることで、それらを抽象化した問題意識が形成されることを期待した。なお、機能的なスクラップの仕方についても検討させるため、具体的な様式の指示はしなかった。

新聞の定期購読をしていない学生に対しては、図書館の利用を促した。関連記事はコピーすることでスクラップが可能であるし、全国紙・地方紙など複数の閲覧が可能であるため、必要に応じて記事の比較ができるというメリットもあると考えた。

②　ＴＶ番組のレポート

この課題の第１の目的は、テーマに沿ったＴＶ番組を選択し、内容の要約によって得られた情報を整理することである。このとき、情報源としてどのような番組を選ぶのかについても興味のもたれるところであった。また、レポートとしてまとめることによって、電波（映像・音声）メディアの特徴を把握し、そのメリット・

デメリットをふまえた適切な処理について理解することを第２の目的とした。その際、スクラップした新聞記事と関連のあるＴＶ番組を視聴することも可能であり、印刷（活字）メディアとの比較という観点からの考察に期待した。

この課題の今一つの目的は、番組の中で視聴者の勘違い・思いこみを誘発させるような表現や、偏った観点からの表現がないかについて、批判的な見方ができるようになることにある。現在、いわゆる生活情報提供型のＴＶ番組が氾濫しているが、それらの中には、信頼できるデータを用いていなかったり、部分的な効果を拡大解釈していたり、科学的な根拠に基づいていなかったりする場合も少なくない。したがって、批判的な見方を通して、録画したＴＶ番組を教材として安易に提示することへの危惧を感じることができるのではないかと考えた。

レポートする番組は１つ以上とし、情報の発信源を明らかにする意味で、「放送局名」「日時」「番組名」を記録させた。ＴＶ番組における視聴者を飽きさせないためのアイデアは、授業を展開する上で学ぶべき点も少なくない。したがって、レポートを作成する目的で視聴することにより、番組構成上の工夫やプレゼンテーションのテクニックについても発見があるのではないかと考えた。

３－２　課題に対する学生の反応

講義最終回に、課題に対する感想を自由記述で求めた（回答154名）。その結果から、学生が各課題をどのように捉えていたのかについて分類・整理し、考察をまじえて以下に述べる。

①　新聞記事のスクラップ

「新聞を読む習慣ができた（17名）」「記事全体に目を通すようになった（10名）」「新聞に対する認識が変わった（８名）」などの記述から、新聞に対する抵抗感が薄くなった様子がうかがえた。また、「よい情報源（６名）」「現代の問題が理解できる（５名）」「視野が広くなる（３名）」のように新聞の価値を再認識している記述もみられた。

スクラップに対しては、「多くの知識が得られた（17名）」「満足感・達成感・充実感が得られた（16名）」「よい経験・勉強になった（14名）」「面白かった（12名）」「これからも続けたい（８名）」「関心が高まった（７名）」といった記述がみられ、有意義なものとして評価していたといえよう。

その一方で、スクラップの作業そのものに対しては、「大変（20名）」「面倒（６名）」「続けるのが困難（５名）」などの記述があった。後に述べるが、過去にスクラップの経験がなかった学生が過半数を占め、戸惑った様子がうかがえた。

記事ごとのコメントに対しては、「大変（13名）」「難しい（４名）」といった記述が目立つ中、「考えがまとまる（５名）」「文章力が向上した（２名）」という自己分析もみられた。なかには、コメントをつけることが「記事を読む→漠然とした感想を持つ→コメントをつける→考えが整理される→自分の意見を持つ→人と話したくなる→もっと知りたいと思う→新しい情報の収集（記事を読む）→…」というサイクルの一部であることを、自身の体験を通して実感していた学生もいた。

学生すべてのスクラップにつけられたコメントを客観的に評価することは困難であるが、時間の経過とともにコメントの内容に変化が現れる学生も少なくなかった。単なる感想や記事の要約から、内容に対する憤り、怒り、批判、提案へと変化を示したり、自分の言葉で意見を述べる様子がみられたりしたことは、注目に値する。「これまで、新聞の記事を読んだ後で意見を求められたり、話し合ったりした経験がなかった」という看過できない記述もあり、自分の言葉で自分の意見を伝える経験を積む機会を与えることが、大学教育にも求められているのではないかと思われた。

スクラップのまとめとして求めた全体を通しての考察に対しては、「難しい（５名）」「何を書けばよいのかがわからない（４名）」など、苦労していた様子がうかがえた。個々の具体的

事象を帰納的に分析し、抽象化することで普遍的な命題が得られる。全体を通しての考察は、“普遍的な命題”を導き出すこと（問題意識の形成）にほかならないが、“抽象化”を具体的にイメージしにくかったようである。

② ＴＶ番組のレポート

学生がレポートしたＴＶ番組の大半は、情報提供型の番組だった。主なものとして、「生活ホットモーニング（ＮＨＫ総合）」「はなまるマーケット（ＴＢＳ系列）」「おもいっきりテレビ（テレビ朝日系列）」「ためしてガッテン（ＮＨＫ総合）」「発掘・あるある大事典（フジテレビ系列）」「たけしの万物創世記（テレビ朝日系列）」「きょうの健康（ＮＨＫ教育）」があげられる。また、「男と女の生活学（ＮＨＫ教育）」のようないわゆる教養番組や、「クローズアップ現代（ＮＨＫ総合）」「ＮＨＫ特集（ＮＨＫ総合）」「ＥＴＶ特集（ＮＨＫ教育）」「テレメンタリー’97（テレビ朝日系列）」「ドキュメント’97（フジテレビ系列）」「報道特集（ＴＢＳ系列）」「ザ・スクープ（テレビ朝日系列）」などの特集番組のレポートも多かった。単独の番組ではないが、深夜ニュース（「ニュース11（ＮＨＫ総合）」「ニュースステーション（テレビ朝日系列）」「きょうの出来事（日本テレビ系列）」「ニュース23（ＴＢＳ系列）」「ニュースＪＡＰＡＮ（フジテレビ系列）」）の特集コーナーを取り上げた学生もいた。

学生の感想にみられた記述では、「どの番組がよいかわからなかった（７名）」「探すのが大変（４名）」のように、普段自分が興味を持っているもの以外には、いつ、どこで、どのような番組が放映されているのかについて無関心な様子がうかがえた。これは、一方で「普段見なかったものを見た（６名）」という記述につながり、だからこそ「意外と面白かった（10名）」のではないかと思われる。

レポートに対しては、「ＴＶの見方が変わった（10名）」という記述がみられた。まとめる際には、「ＶＴＲに録画する（４名）」「メモを取る（３名）」などの工夫がみられた。これらは、情報メディアの特徴をふまえた行動であると考えられる。

また、番組内容を考察するにあたり「複数の番組を比較する（３名）」「スクラップした記事と比較する（２名）」という記述がみられた。具体的には、新聞で特集を組んでいた内容と関連した番組を視聴したレポートも複数あった。この場合は、予め関連情報を整理した上で臨んでいるため、理想的な形で相乗効果が得られていたと考えられる。すなわち、新聞の記事内容だけではイメージしにくい部分が映像によって具体化したり、ＴＶ番組の記憶が不鮮明な部分を活字によって確認したりという活動を通して、より理解を深める効果に結びつくのではないだろうか。こうした行動は、それぞれの情報メディアの特徴をふまえたものであり、両者を相互補完的に位置づけたものであるといえよう。さらにこのとき、ただ単に新しく得た情報を整理するだけでなく、これまでに得ていた情報と比較検討したり、意図的な操作が介入している可能性について考えたりする経験につながるのではないだろうか。

また、「ＴＶはよい情報源（２名）」としながらも、「内容に引きずられるので恐い（１名）」「情報をそのまま受け入れてしまう（１名）」という自己分析もあり、「批判的に見る目を養いたい（１名）」という考察ができていた。今回の課題では、映像・音声による情報を活字に整理することが、得られた情報の真偽、信憑性について再確認する機会になっていたため、その情報を吟味できることも期待したが、具体的にそのような姿勢でレポートされたものはなかった。

レポートの多くは、番組内容の概略を説明し、感想を述べたものであったが、期待した以上のレポートもあった。番組内容に関連する複数の文献を調べ、それらと比較しながら番組で取り上げた事件を分析し、残された課題を考察するものであった。自身が持っている興味・関心に合致した情報が提供されたときに、それがさら

なる探究への動機づけになる好例であったと考えられる。

3－3　受講終了半年後の学生に対する調査

1）調査の概要

課題提出の後、約半年経過した時点で、学生に対して調査を行った。調査の概要は以下に示すとおりである。

調査時期；1998年2月

調査対象；家庭科教育法（初等）受講生のうち、前期の小学校専門（家庭）の受講学生134名

調査方法；自己記入式によるアンケート調査

調査内容；新聞を読む習慣、スクラップ、ＴＶ視聴の状況について

2）結果及び考察

新聞を読む習慣、新聞記事のスクラップ、ＴＶ番組の意識的な視聴について、受講前と受講終了半年後で比較した（図2～4）。χ^2検定の結果、1％の有意水準ですべての項目に有意差が認められており、学生の状況に明らかな変化が現れたといえる。そこで、変化の様子を確認するため、それぞれの項目を4点法（いつも読む（する）；4点～まったく読まない（しな

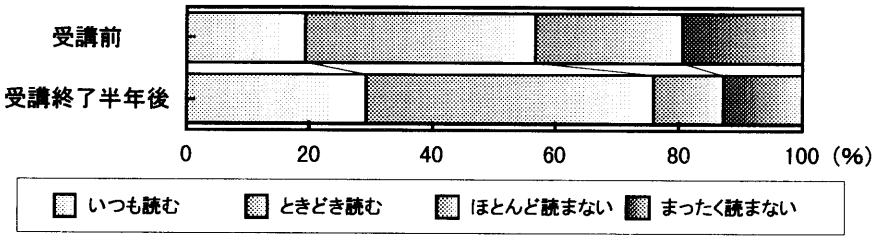


図2　新聞について

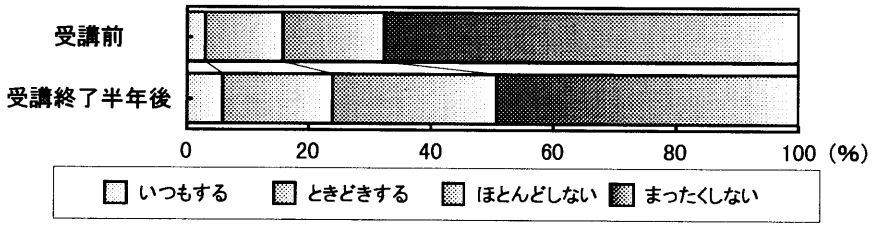


図3　新聞記事のスクラップについて

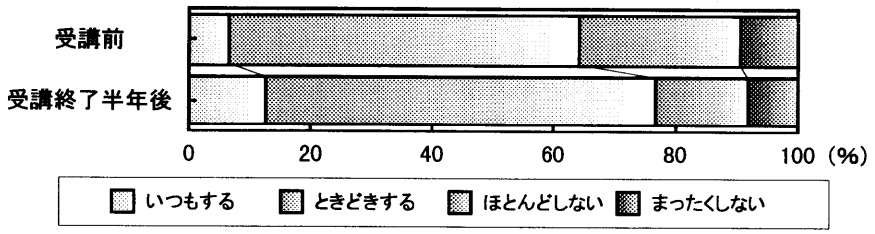


図4　ＴＶ番組の意識的な視聴について

表１　受講前後の行動の比較

項　　目	受講前		受講終了半年後		有意差
	平均値	SD	平均値	SD	
新聞を読む習慣	2.60	1.006	2.94	.961	**
記事のスクラップ	1.50	.833	1.78	.926	**
ＴＶの意識的視聴	2.65	.727	2.87	.693	**

**；$p<0.01$

い）；１点）で得点化して比較した（表１）。その結果、すべての項目の得点が１％の有意水準で明らかに上昇していた。

３項目の中では、受講の前後を通して新聞の「いつも読む」割合が最も高く、比較的習慣化しているといえよう。また、受講終了半年後に「いつも読む」割合が約10％増加していることに加え、平均値の伸びが大きくなっていることから、前項で述べた新聞を読む習慣に関する学生の回答が裏付けられたといえよう。

スクラップについては、受講前に７割近くの学生が「まったくしない」と回答しており、経験のなさが、課題に対する戸惑いにつながったのではないかと考えられた。また、受講終了半年後の「いつもする」割合や平均値の低さから、スクラップが習慣化しているとはいいがたい状況にあることがわかった。スクラップの意義は理解できたものの「大変」で「面倒」な作業であり、「課題だからできた」という認識を持っていることは否定できない。

ＴＶ番組の意識的な視聴は、「ときどきする」を含めると受講終了半年後の割合が他の項目と比較して高くなっており、ある程度意識的にＴＶ番組をチェックするようになったと考えられる。レポートの作成を通して、ＴＶ番組の存在を知ったことが、受講前と異なる視点でＴＶを視聴する姿勢につながったのではないだろうか。

４．結語

家庭科教育における生活情報の収集源として新聞・ＴＶに着目し、それらを有効に活用するための課題の提示を試みた。その結果、受講の前後で「新聞を読む習慣」「新聞記事のスクラップ」「ＴＶ番組の意識的視聴」に有意な差が認められ、明らかに向上していると考えられた。

また、２つの課題を体験することにより、活字メディアと映像・音声メディアの特徴を把握し、それぞれが持つメリットとデメリットを比較検討できるのではないかと考えたところ、この点を意識した考察が確認できた。

さらに、課題を通して学生が満足感・達成感・充実感を得ることと、それらが自信につながることを学生自身が実感することの重要性が理解できた。すなわち、自分自身の変化を自覚することが、大きなエネルギーを生む可能性を持っていることを自己認識させることが、大学教育、特に教員養成における専門教育の中に求められているのではないだろうか。こうした経験に基づく意識は、児童・生徒への有効な支援につながるという意味において、教育効果が期待できると考える。

注

１）郵政省「通信白書（平成９年版）」大蔵省印刷局、1997年、p137
２）日本情報処理開発協会編「通信白書1996」コンピュータエージ社、1996年、p91
３）吉本敏子「第６章　社会の変化に対応した学習指導の実際」『21世紀における男女共生のための家庭科教育』中部日本教育文化会、1996年、p160
４）インターネットの文部省ホームページ

(http://www.monbu.go.jp/series/) に詳しい。

5）東珠実「第8章　生活情報と生活経営」村尾勇之編著『生活経営学－21世紀における個人・家族の諸課題－』、家政教育社、1997年、pp.136-138

6）三宮真智子「小学校段階における情報教育に対する一考察」鳴門教育大学学校教育研究センター紀要、1、1987、pp.19-27

7）三宮真智子「人間の情報処理と情報教育」永野和男編著『発信する子どもたちを育てる　これからの情報教育「情報を見抜く目」「情報を処理する智恵」の育成をめざして』高陵社書店、1995年、pp.15-18

8）高部和子「消費者教育現場への六つの提言」宇野政雄発行『消費者教育特論　消費者教育を考える第一輯』消費者教育支援センター、1996年、pp.77-78

9）村井昭一「生活に密着した消費者教育」宇野政雄発行『消費者教育特論　消費者教育を考える第一輯』消費者教育支援センター、1996年、pp.148-149

10）後期に開講している家庭科教育法（初等）は、前期の小学校専門（家庭）とあわせて受講することを推奨している。そのため、前期の課題を後期の授業の中で活用できるように配慮している。